

青年の自主性とキリスト教教育

齊藤良子

はじめに

青年期は児童から成人への移行期であり、身心ともに急激な成長発達を遂げる波乱万丈の時期である。この人生における過渡期をいかに乗り越えるかは人間一生の生き方にかかわる重要な問題である。次の時代を担う青年が現代社会の中に埋没して自分だけの小さな幸福や成功を求めることなく、多くの可能性の中から一つの正しい目標を選び、それに向かって不屈の歩を進める自主的な生き方をするためにキリスト教教育の果たす役割は何かを考えていきたい。

第一章 青年期の特徴と世代的特質

かつて新聞紙上ににぎわしたヒッピー族やフーテン族は常軌を逸した若者として社会病的視点から考えられた。そして彼らを社会復帰させるには一体どうすればよいかと論じられたのである。しかし、彼らの奇異に思われる服装や行動は、戦前の旧制高校生の弊衣破帽とある共通性をもっているのに気付くのである。勿論、ヒッピーやフーテン族の中には旧制高校生とは全く異質なものであることを見出すのであるが――

青年の言動は「青年性」と「世代性」との微妙な交錯の中に発現するものであるから、この点に留意しないと青年に共通な特質をあたかも現代にだけあらわれた特質であるかのように誤解したり、逆にまた現代に特色をもってあらわれている行動様式を青年期的な言動と簡単にみなしてしまうのである。

最近ヒッピーもフーテンも少なくなったが、依然として青年の間にみられるモノセックス(男女共通)のスタイルには青年らしい自己主張がうかがわれ、昔の青年とは全く異質な心理構造を持っていると一言のもとに断定するわけにはいかない。

青年が既存の価値大系の外に自分の世界を求めてゆくのは今も昔も同じである。多くの青年たちが大志を抱いて次々にその時代の桎梏から離脱していったことは周知のことである。現代青年も既存のものに対して非常に懐疑的になっている。現代社会は青年にとってきわめて不透明であり、見せかけの自由に満ちたものである。

「豊かな民主主義のなかで豊かな討論が広くゆきわたり、また確立された枠組のなかでは豊かな討論は大いに寛容である。あらゆる見解が聞き入れられる。すなわち、共産主義者からフェシストまで、左翼から右翼まで……。さらに、メディアを通して際限なく長びく議論では、ばかげた意見さえ賢い意見と同じように尊敬されるし、誤った知識をもっているものも知識のあるものが語るかぎり語ってよいし、宣伝が教育と一緒になっかけてめぐり、真実は虚偽と手を組んで進んでいる」¹⁾ という

注、1) Herbert Marcuse, *A Critique of Pure Tolerance*, 大沢真一郎訳, 純粹寛容批判(せりか書房, 1964), p. 124.

現代社会は管理社会の官僚組織と、抑圧の寛容と呼ばれる「柔構造社会」の奇妙な組合せからできている。²⁾

現代青年の特質について考えるとき、どこまでが「青年期的現象」であり、どこからが「現世代的現象」であるかを交互作用のうちに理解していかなければならない。たとえば人間疎外や感情の鈍麻を特徴とする非行性などは現代社会の反映であって、戦前には見られなかったものである。

現代青年は巧利的、打算的で礼儀作法をわきまえず、落ち着きがなく、理屈っぽい、頭の回転が早く、科学的知識に富み、何ことも器用にこなしていける若者といわれる。また、現代資本主義社会の中できびしい生存競争に勝ち抜きながら新しい社会をつくり出すという二重の仕事を両立し得る若者ともいわれている。現代青年の理解ははげしく変動している社会との関連の中で捉えられ、論ぜられなければならない。

大人は現代青年を自己中心的で親不孝だときめつける。しかし青年は親に感謝しているし、親孝行もしたいと考えているが、大人が要求しているような親孝行を全面的に肯定できないと言う。親孝行とは必ずしも親の言いなりになることではなく、ある場合は親に反対しても客観的に正しいと思うことを実行することだと主張する。親の考えが間違っている場合は、それをはつきり指摘することがむしろ親孝行になると言う。要するに大人と青年とでは解釈のしかたが違うのであり、あらゆる面において同様の摩擦が起る。

家庭教育とかしつけといわれるものには明確な意味も基準もなく行われているものが少なくないが、青年はそういう曖昧さに反撥する。青年を理解し、教育するためには彼の側で正しいと信じていることは何かを先ず知ることが肝要である。一般に現代青年の特質といわれているものは大人の目から見たものであって、必ずしも青年の実態を把握していないのではないと思われる。

現代青少年をとり囲む空間は都市化して自然性を欠き、家族関係は兄弟数が少く、親の目は充分行き届き、一見のぞましい状態にあるように見えるが、古い伝統とのつながりを失い、きびしさやたくましさ欠けているのが目立っている。また、文化的刺戟が強く、人工的人間形成の姿をとっているように思われる。

身心の成長発達の過程にある若者にとって自然との接触は重要な意味をもっている。しかし、自然の場で身体全体をぶっつけて学んだり、遊んだりすることは不可能な時代になってきた。というのは産業の高度成長に伴う輸送機関や交通の激化、または住宅の増加によって運動場、遊び場の減少を来したからである。こうした環境の変化は青年の生活に変容を与えた。青年の自然に対する興味は薄れ、テレビ、ラジオ、雑誌、音楽その他の娯楽に異常なまでの興味を示すようになった。³⁾

親の教育態度も昔とは変ってきた。戦前は親の権威をもって教育する傾向が強く、親に服従することを強いたが、今日では若者の気持を理解しながらなるべく欲求不満を起させないように指導しようとする。親の態度が民主的になったことは喜ばしいことであるが、今日の問題は親に理解があり過ぎてきびしさに欠けている点だと思う。理解と愛情に育まれると素直でよい人間がつくられる

注、2) 西平直喜編, *青年心理学研究の課題と方法*, (金子書房, 1973), p. 22.

3) 高良武久監修, *現代の精神衛生講座*, (誠信書房, 1972), pp. 34~36.

かもしれないが、耐忍力のある逞しい人間は形成されない。現代青年の弱点の一つは苦しみに耐え、自分の理想や信念を貫く勇気や気魄に乏しいことではなからうか。

テレビやラジオの普及により毎日に新しい文化的刺激が加えられるようになった。若者は日々新しい読物や漫画や音楽にさらされている。そして知らず知らずの中に刺激に順応し、より強いものを求めるようになってきている。今日では多くの青年たちはテレビを見ながら、ラジオやレコードを聞きながら勉強するようになってきている。このように絶えず新しい刺激にさらされている生活では落ち着いてじっくり思考する態度が形成される筈がない。身体的にも精神的にも不安の中に生きる青年は孤独を意識することを恐れて集団の中にもぐり込み、雑談や喧騒の中で不安や恐れをまぎらわそうとしているといわれる。⁴

現代青年の成長における大きな問題は早熟化現象である。身体の成長は年々進んでいるが、これに伴って性的成熟も早まっている。特に六才から十四才までの成長のしかたには目を見張るものがある。それに較べて心理的面の発達に伴わないのでアンバランスが起り、青年の問題を一層深刻なものにしている。小学上級生から性教育の必要性が叫ばれている現状である。

自我というものが十分に機能していないときにおいては青年の性格とか行動は一方では環境に規定されながら、一方では生物学的身体的要因に規定されている。戦後の日本における青少年の発達加速現象については既に述べたが、一般に社会階層の高い家庭の若者は体位の向上、性的成熟が早いといわれている。しかし、発達加速ということは実際にすべての若者の間で起っている現象である。⁵

現代青年の体位の向上と人格の社会的成熟との間に非同時性をますます高めていることは問題である。戦前ならば異常と考えられたであろう現象を中に含みながら正常の発達が行われているのである。⁶ この成長発達におけるアンバランスは青年に劣等感、不安感を与える。

現代青年はフィーリングの世代といわれ、自分の置かれている状況を感覚的に捉えている。ある封鎖に加わった学生は、その状況が息苦しく不快であったと表現し、その気持はヒッピーになって踊り狂うか、全共闘になってゲバ棒をふるうかしなければおさまらない感じであったと説明している。感覚的であることは客観的であることではない。感覚的に終始して感情を欠き、知覚にとらわれて想像力を欠いた青年に、将来の展望に立つて未来を変革してゆく論理を望むことは不可能である。⁷

青年たちの間で用いられることばに「おりの」というのがある。これは単にやっていた仕事を中止するとか、落後するという意味ではなく、緊張に耐え切れなくなって投げ出すとか、急にむなしさを感じて続けられなくなるとか、自分が止めても大したことはあるまといふ現代青年の社会に対する「かまえ」全体を反映しているといわれる。それは脱社会、脱企業、脱まじめ人間の「脱」に

注、4) 前掲書、p. 43.

5) 日本基督教団教育委員会編、現代青少年をめぐる、(日本基督教団出版局、1971)、pp. 96~98.

6) 前掲書、pp. 100~102.

7) 西平直喜編、前掲書、p. 25.

通ずるような価値大系の内的崩壊現象、またその合理化として使う、甘え、無責任、快樂追求、逃避の姿勢すべてを含んでいると思われる。⁸ 「おりの」とは混乱状況に陥った青年のとり社会、人生に対する拒絶の姿とみなすべきであろう。

現代青年像を描くとき注意すべきことは、大抵の場合その資料を新聞、テレビ、ラジオ、及び週刊誌などから得ているので、いつも常道を逸脱した青年がとり上げられる。そしていつの間にか彼らが現代青年の典型であると信じ込まれる危険性があるのである。新聞やテレビ、ラジオはニュース・パリュールという視点から青年を捉えようとするので、現代青年は救いようのない混乱状態の中にいると印象づけてしまう。しかし、健康で真面目で、真剣に生きようとしている若者の多いことを忘れてはならない。現実はいかに未熟でアンバランスであっても、将来に希望をもって着実に前進したいと願う若者に目をとめなければならないと思う。青年教育はこの意味で歪曲された青年像をその本質に従って批判し、正さなければならないのである。

第二章 青年と家庭環境

人間形成に著しく影響するのは家庭環境である。家庭環境を構成する要素の中でとりわけ母親の与える影響は大きい。子どもはこの世に生を受けた瞬間から母親との密接な関係に置かれ、徐々に人格というものが形成されてゆく。乳幼児期は人間の生涯の中で外界の影響をもっともこうむり易いので、この時期における好ましくない親子関係は生涯に決定的な傷あとを残すといわれる。母親の愛情を受けずに育った子どもは、青年期に入つて精神の異常を示すケースが多いという。逆に愛情過剰の場合は子どもを自立性のない情緒不安定な人間にしてしまうといわれる。このように親の生活態度、教育のしかたは子どもの人格形成と密接な関係をもっている。故に、今日の特質を理解するにはその家庭環境を知ることが重要である。

青少年教育の目標の第一は、よく考えて責任のある行動をとる人間をつくることである。いかなる状況の中にあつても勇気をもって耐え、自己の信念をつらぬき、自己の理想に向かつて一路邁進する青年像を目標としている。

戦前と今日の家庭を比較するとき、あらゆる点において今日の家庭環境が整っているように思える。経済的にも一応安定し、文化的生活が営まれ、主婦の家庭内労働は軽減され、子どもの数も平均二人ぐらいであり、行きとどいたマザリングが期待され、精神衛生上好ましい条件が揃っているように見える。親の教育態度も自分が子どもの時に受けたものよりもはるかに民主的になってきた。また今日では家庭生活も公生活と同じように尊重され、私生活を人間性回復の場と考えるようになり、プライバシーを重んずる近代市民的態度も生れてきた。⁹ こうして家庭は次第に子ども中心のものになっている。しかしながら現代青少年の特質を考えると、昔よりも好ましいとは決して言えない。このように教育熱心な親達に生まれながら多くの問題をかかえているのは何故であろうか。

注、8) 前掲書、p. 12.

9) 高良武久監修、前掲書、pp. 37~38.

我が国における親子関係には子どもを自分の分身ないし延長と考えるわが子意識がある。¹⁰ したがって子ども自身の必要は無視されやすく、すべてを親の考え通りに実行する。特に母親と長男との固着現象は目立っている。この点では昔も今も本質的に変わっていない部分があると思われる。

家庭のみならず社会においても今日ほど教育に期待がかけられている時代はかつてなかった。商業主義はこの点に目をつけ、教育的玩具、絵本、参考書の類は巷に氾濫している。また英才教育研究所や進学塾が至る所にでき、親達の教育熱を煽りたてる。学校も家庭に協調してほぼ同様な教育計画をたて、教育を進めている。現代の青少年はこうした計画路線の中に押し込められて無抵抗の状態にあるように見える。親や教師に操作されて育つ若者が自主性のない、依頼心の強い、無気力な人間になるのは不可解なことではない。

現代の子どもの中には意欲的に遊ぶこともできない者がいるという。勿論、自分に与えられた時間や場所を巧みに使って充分遊ぶことのできる子どもは多いが、問題なのはむしろ時間的にも遊びの種類についても、周囲から規制されていて意欲的に遊ぶこともできない子がかかりいるということである。¹¹ 大人にいちりまわされて育つと、外観は整っているようにみえても、正しい判断力や耐耐力、また適応性を養うことができないからである。

現代青少年が家庭や学校であつて受身で生きる状態におかれていることは既に述べたが、しかし自分の利益になることや興味関心のあることにはすばやく反応を示すのである。いわば生活技術を巧みに身につけているといえよう。すべてを金銭的に考え、損得できめようとする。この巧利的、打算的傾向は現代社会の隅ずみまで浸透している。現代人はこういう社会を無批判に受け入れ、その中で生き抜こうとしている。したがってこの産業社会にある力をもって臨むことのできる知的な面だけを向上発展させようとする努力がはじまるのである。子どもの人格形成にとって重要な社会性とか霊性の問題は軽視され、ただこの産業社会における競争で勝利を得ることしか眼中にない親達は子どもを一流校に入れるためにあくせくする。親や教師の関心事はどの学校に入れば社会に出るとき有利かということだけである。

最近母親に暴力をふるう中高生が目立つといわれるが、これは数年前大学紛争の担い手となった若者たちの場合と同様に、長い間無抵抗、無反省で過してきた者たちの心の奥底に堆積していたものが突然爆発したとみなすことができる。若者の暴力行為を批難する前に、彼らをそこまで追い込んだものは一体何かを究明しなければならない。

以上のように考えてみると、日本の母親の子どもに示す愛情の中には子どもの人格を尊重し、その幸福を守ろうということだけでなく、多分に自分自身の満足のためという面が強い。換言すれば、我が子に自分の理想を追求させ、幸福を獲得させ、ひいては自分の生を全うしたいという打算があるのである。

現代青年の三無主義の原因の一つは家庭環境及び社会環境の中に存するので、青年教育を考えるとき先ずこれらの問題がとりあげられねばならない。教育の目的が価値ある人間形成であるならば

注、10) 千輪浩監修、青年心理学、(誠信書房、1959)、p. 49.

11) 日本基督教団教育委員会編、前掲書、pp. 103~104.

家庭にあつては親自身が、また社会にあつては大人たちが生活の姿勢を正し、よい模範を示さなければならない。強制とか硬教育とか訓練だけでは全人教育を望むことは不可能であるから。人格教育とは外から教え込まれるというよりむしろ捉えられるものなのである。親や教師が口やかましく説教するよりも、自分たちの日常生活を通してよい範例となることが肝要である。青年に感動と尊敬の念を与えることのできないみずからの生き方を反省することなく、ただいたずらに青年の欠点を並べたて批難するのであつてはならない。表裏のある大人の道徳生活をおしかくし、青年にだけ自制、勇気、博愛などに貫かれた自主的な行動を望むことは所詮無理なことである。

自主的行動というものは人間の自由を前提としている。自由のない自主的行動はなく、また自主性のない自由はあり得ない。家庭や学校において自主性の重要性を教えながら、実践する機会を与えない。人間は決して遺伝と環境だけで全く規定されてしまう存在ではなく、この両者に対してある態度をとる自由が常に与えられていることを忘れてはならない。この一片の自由というものに留意することは教育上きわめて意義深いことである。¹²

家庭は青少年の人格との触れ合いを可能にし、彼の心を動かす原動力ともなる人間の邂逅の場であらなければならない。¹³ 青年の切に求めているものは生活における生命の燃焼感であり、人間的師表である。もし青年が真実の人格に触れ、深い感動と畏敬を覚えるとき、それを捉えてみずからのものにしようとするであろう。その感動と畏敬こそ真の倫理的自主性を培う母胎であり、これはキリスト教信仰をぬきにして考えることはできない。

第三章 キリスト教信仰と自主性

次の時代を担う青年がこの民主社会に適応するだけでなく、この社会を改善してよりよい社会をつくり上げるために必要なものは自制、勇気、博愛などに貫かれた自主性であり、教育においても最大の顧慮を要する。自主性というのは自分勝手なことを自分の判断で行うという意味ではなく、また単に積極的に行動するということでもない。自主性とはそれぞれの課題状況の中で意志の統御機能による自制、勇気、博愛などといわれる特性を帯びた決断が適切にしかも自由になされるということの意味している。¹⁴

自主性というものは人間の自由を前提としていることは既に述べたが、自由という名において人間は尊い犠牲的行為をなし得るし、同じ自由という名の下で恐るべき残虐行為もなし得るのである。人間はある限界状況の中でもきよい良心を失わずにいたることができる。第二次世界大戦中多くのキリスト者は迫害を受けて投獄されたが、最後までキリストに忠誠を尽し、信仰を全うした例を聞く。この倫理的自由が人間の尊厳を形成するものであるならば、教育において青年たちにこの価値を身につけさせることは重要な課題である。

人間の倫理的自由の発展は感動や畏敬をひき起こすような状況において完全なものとなるといわ

注、12) 霜山徳爾編、自主性、(誠信書房、1969)、pp. 4~5

13) 望月 衛、転機、(誠信書房、1967)、pp. 38~39.

14) 霜山徳爾、前掲書、p. 3.

れる。しかし倫理的自由による「自主性」は強制的に教え込まれるものではない。たとえばある青年が自分の好まない仕事を愛する母親のために進んでやったとする。彼は愛する母親の期待に対して自発的に行動したのである。これは青年に倫理的自由の体験を与えたことになる。彼は客観的な要求を理解し、それをその状況にふさわしい責任性の中に行動したからである。

青年のように心情的な人間は他の誰よりも切実に神との結びつきを必要とする。神の絶体的支えなしには感情の赴くままにその力を燃焼させる傾向がある。こうした無軌道な力の消費は心的疲労と虚脱を伴いやすい。現代医学はこれを精神衰弱と呼んでいる。青年期は身心ともに危機にさらされる波乱万丈の時代であり絶えず巨大な圧力におびやかされる。青年が神のあわれみにより、また節度のある生活によって身心を規律の下におくかぎりは、そうしたものは大した害を加えることはできない。しかし、神との断絶状態にあるとき、青年はこの荒々しい侵入者から自己を防衛することは不可能である。¹⁵

キリスト教教育は人間の罪の問題をとりあげ、罪からの解放なくして人間の自由はあり得ないという。罪からの解放とはキリストの救いにあずかることであり、それは十字架上のキリストを通してなされる神の愛の呼びかけに全人格をもって応答するとき体験するものである。

現代は自然科学の目ざましい進歩を謳歌する時代である。人間がロケットを飛ばして月世界を探索できる時代になった。しかし人間の心はますます虚しくなっている。現代人の内的弱さ、もろさを見るとき人間がどれほど自己の意志とは無関係なものに支配されているかを認めることができる。聖書はそれが罪によるのであることを明示している。罪とは人類全体の出発点において犯したもので、原罪と呼ばれるものである。

神はご自身の姿に似せて人間を創造された。しかし人間は神の御手によって動かされるロボットの存在ではなく、神と人格の交わりをもつようにつくられた。人間には人格が与えられ、その中核に自由がある。そこにキリスト教教育の目指す自主性の本質がある。ところが人間は自由意志を濫用し神にそむいて罪を犯し、現在みるところの無気力状態に陥ったのである。人間の内的脆弱さは罪の介入によるもので、この問題の解決なしに人間の自由はあり得ない。

我が国のキリスト教界には一種の主知主義という風潮があり、「信仰」を「知能の働き」に局限して考える傾向がある。福音の自覚的理解と聖書の知的学びのみが正しい信仰だと主張するのである。しかし信仰とは知的にも感情的にも感覚的にも自己を越えた神、すなわち福音内容に対して関わるのである。

キリスト教信仰をもつということは福音を責任をもって受け入れ、自主的に判断し、正しくキリスト教教理や聖書の教えを理解し、みずからの感情や感覚を統御して行動し、感動と畏敬をもってキリスト及び教会の現実性を把握することである。これが先きに述べた福音に対する全人格的信仰の内容である。

福音によって救われるとき、その人は靈的に新生したいという。神の側からみて人間の宗教的身

注、15) A・ケーベルレ、宮田光雄訳、キリスト教的人間像、(日本Y M C A同盟出版部、1969)、pp. 62~63.

分が変り、地上の国籍から天上の国籍に移されたということで古い自我と新しい自我との間に決定的な断絶がある。キリスト教教育はこの断絶を挟んで救われる前と救われた後に分けられる。前期においては救霊を目指す教育であり、後期においては救いを再確認し、キリスト者の人格形成を目指すのである。

神の恩寵により罪から救い出された青年であっても、彼の本性にくだりつた悪の存在を一撃のもとに退けることはできない。今までの神なき生活が青年の身体、精神、霊のうちに残した傷あとは一朝一夕には消え去らない。救われたという確信が与えられているにもかかわらず、なお現実生活においてみじめさに耐えていかねばならない。しかしながらキリスト者はよろめきながらも自由な第一歩を踏み出すことができる。この第一歩は神が御国においてあずからせようと望んでおられる全き救いの証印として受け取ることができるのである。¹⁶

キリスト教教育の起源は速くイスラエルの先祖アブラハムにおくことができる。アブラハムがメルキセデクを師と仰いで信仰の道を学び、それを自分の家族に伝えたのである。キリスト教教育の場は家庭であり、教師は親であった。旧新約聖書を通してイスラエルが子どもの教育に熱心であったのを知ることができる。イスラエルの両親はいつも子どもと共に神に向かって立っていた。神が自分たちの祖先をどのようにエジプトの地から導き出されたか、またどのような御業をなして下さったかを口うつしのような形で伝えたのである。何故律法を守らねばならないかという質問に対して、親から親に伝えられた通りの答えを繰返した。そしてその度毎に律法の背後にある神の恵みと導きに新たなる感動と畏敬を覚えたのである。神との出会いとこの信仰の継承は親と子、教師と生徒が共に神の前に立つという姿勢をぬきにして考えることはできない。

社会全体が人間まで含めて規格化していく現代にあつて、人間の魂がどんなに尊いものであるかを聖書は教えている。他人と比較しながら優越感や劣等感を味わわせる一般教育のやり方ではなく、すべての人間が人間らしく生きるためには神のもとに立ち返らねばならないと言う。神との正しい関係を回復し、神のみこころに服従して歩むとき平安と喜びが与えられるというのである。またキリスト教教育は人間の能力の限界を明確に示している。人間が自己の限界を知られるということは悲しいことであるが、またそこに人間の偉大さがあり、そのことがかえって人間の個性の輝きを増すものであることを知らせてくれるのである。¹⁷ 更に人間ひとりびとりに与えられた役割のあることを教え、人間が力の限りその責任を果していくことに最高の自主性の充足があるというのである。¹⁸

ガラテヤ書五章一節に「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから堅く立って二度と奴隷のくびきにつながらなければならない。」とある。またキリスト者の自由が自己中心的行為をするため濫用されてはならないとガラテヤ書五章十三節に記されている。「兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは実に自由を得るためである。ただその自由を肉の働く機

注、16) 前掲書、pp. 69~70.

17) 霜山徳爾、前掲書、p. 203.

18) 前掲書、p. 204.

会としないように —」

すべてのことはキリスト者に許されているが、すべてのことが信仰生活に益となるわけではなく、またすべてのことが人の徳を高めるのでもない。この世の財産を所有することは許されているが、それのとりこになってはならない。財産、恋愛、成功などは神から禁じられてはいないが、神との交わりのためにこれら一切のものから自由であるかどうかを問われるのである。

既に述べたように、キリスト教教育は人間の自由及び自主性の限界を明らかに認識することを教える。人間の自主性がその限界を越えて主張されるとき罪が生じる。そしてその罪がもたらす結果は、この自主性を支えている人格の崩壊である。それは神を傷つけるのではなく、自分自身を破滅に導くことになるのだと —。